福永信 略歴　あるいは作品に関するメモ

2010

6 月、『星座から見た地球』刊。初めての宇宙の本。

2011

11 月、『一一一一一』刊。初めての数学の本。

2012

3 月、『こんにちは美術』刊。全 3 巻。子供のための美術の本。私のもっとも小さい読者のための本。これは 10 年くらい前にやってた、小学 3、4 年生くらいを対象にした「今月も美術」という連載コラムがもとになっている本だから、 その初出時の読者はもう大人になっている。読者の姿を見たことはないけれど、大人になっているのは間違いない。

子供の読者はずっと子供の読者ではいられない。待っていてくれない。何年かすれば髭も生え、あるいは化粧もかかさないような、もう公園のスベリ台でオシリをつけて足あげて、いきおいよくすべるなんてことはしないような、大人の読者になってしまう、そして、一度大人になってしまえば、あとはずっと大人のままだ。

何年たっても大人のままというのは、なんか不公平というか、不思議だ。でも、ほんとうのほんとうのところ、この世に大人っているのかな。

2013

2 月、『三姉妹とその友達』刊。これが最初の 1 冊かもしれない。(1 冊目から順番に書いているつもりだったが、ほんとはそうではなかったのかも)

3 月、「言葉って小さい」と福田尚代が隣で言うのを聞く。

福田尚代 略歴　あるいは作品に関するメモ

2010

「髪の毛も ふたつの目も おどおどした頭も 天国では見えなくなってしまうのでしょうか…」エミリ・ディキンスンの詩の一節に心をつらぬかれる。大切にしまっておいた古い少女漫画から、女の子たちの髪の毛と瞳と指と唇を切り抜き、箱にしまう。

小学生の時に書いた作文と詩と読書感想文の原稿用紙の束を見つける。言葉が書かれている升目をすべて切りとる。写しはとらない。切り離した升目を混ぜ合わせる。二度と読むことができない。

真新しい原稿用紙は湖に見える。湖上から罫線の梯子が立ちのぼり、 天へと伸びてゆく。一段上る度に、升目がひとつ落ち、水面に浮かぶ。

原稿用紙を彫刻する。波打ち際が現れる。《海岸線》と名付ける。

原稿用紙から一つの升目をくり抜き、 穴をあける。同じことをくり返す。ぴったりと重ねる。高く積みあげる。紙の天辺に、小さな四角い、深い井戸があらわれる。底を覗く。

今は亡き女性たちの名前を、 白や灰色の色鉛筆に刻印した作品《カラー、 エリス、 アクトン・ベルの詩集》 をもう一度とり出し、 削りはじめる。やがて色鉛筆は芯だけになる。その芯へ彫刻をはじめる。ひどくもろい。殆どが粉になる。わずかな形だけが残る。

11 月 6 日 けしごむの夢を見る。白い骨のような輪郭線だけが残されている。

もう一度、すべての原稿用紙の升目を切り抜きはじめる。無数の紙片が遠い場所に降り積もってゆく。細い罫線だけが残る。

〈物〉を砕き続けた果ての微粒子、言葉の粒子の素描をはじめる。

少女漫画の日光写真／世界の残像の素描をはじめる。

2011

光は容赦なく降りそそぐ。罫線だけになった原稿用紙を、日光写真で写しとる。

2010 年にはじめたことをひたすら続ける。くり返しの中の微細な変化。

2012

古い少女漫画の一頁に、針で細かな孔をびっしりとあける。陽にかざすと、無数の孔のせいで、泣いた顔も笑った顔もいっせいに消える。不意の救済。

針を持つ。文庫本『ランボオの手紙』の一頁に、隅々まで孔を穿つ。太陽にかざした途端、文字は消え、霧散する。

素描と、刺繍した少女漫画へも、穿孔がはじまる。

本の背のしおり紐を切りとり、 指で綿状にほぐした過去の作品《書物の魂 あるいは雲》をとり出し、さらにほぐしはじめる。繊維が細かくなりすぎて、ついには色が消える。

2010 年にはじめたことのすべてをまだ続けている。

2013

「個展の題名を回文で」と頼まれた夜、「慈雨 百合 粒子」という文字が宙に浮かぶ夢を見る。

夢の中で見たコラージュにハッとする。なぜか私は、それが自分の作品であることや、題名も、素材も、過去の作品《髪の毛も ふたつの目も おどおどした頭も…》の姉妹であることまで知っている。目が覚めて、 古い少女漫画をとり出し、 その小品《頬と余白》を作りはじめる。

コラージュの連作、一連の回文、原稿用紙とけしごむと色鉛筆の芯への彫刻、しおり紐の続き(見知らぬ島の出現)、砂浜に休む《翼あるもの》、少女漫画への刺繍と穿孔、素描への穿孔、本の頁への穿孔。

2010 年以降にはじめた事のすべてが、ひとまず終了する。